



串田治、3年振り4度目のステップスギャラリー個展である。串田はセイラムギャラリーでの個展(2014年3-5月)ステップスのグループ展(2015年7月)韓国・シェーマ美術館におけるグループ展(同年11月)に参加した。しかし串田が3年の期間を経て追求していた展開が、今回明らかになったということもできよう。長いキャリアを誇る串田ではあるのだが、絵画に対する考察に止むことはない。串田は今回、《235-246》(紙にアクリル/73×52cm/2016年)という連作を画廊内の一つの壁面に11枚、入り口に1枚展示した。ギャラリーのオーナー吉岡まさみによると、当初3×4枚を一面に展示する予定であったが、実際に展示すると一列にしたほうがいいということになった。順番も適宜であり、食み出した一枚を入り口にしたという。事務所には作品を展示しなかった。小品もない。

作品は展示によってインスタレーションにも見えるが、一枚一枚が独立している。1915年に発見された現代美術、日本の美術の原型である襖絵や屏風、仏教什器もまた、インスタレーションの要素を帯びている。インスタレーションとは莫大な土地を要するのではなく、近代に捏造された「伝統」に対するヨーロッパにおけるアンチテーゼであると解釈するなら、串田の作品は串田の作品である。

串田は絵画の可能性を信じて、作品の制作を続けている。串田が発表を始めた1978年とは、既に絵画は死んだと叫ばれていた時代であった。串田のこれまでの活動の軌跡を追う画集はまとめられていない。新作を見るしかないのだ。

串田は今回、発色のよい黄色と発色しない灰色に限定した。複雑に蠢く画面が幾層になっているか串田に確認したところ、二度しか重ねていないと聞いて驚愕した。ここには私がステップスギャラリー評で三度考察したストロークの問題は影を潜める。描く「行為」も考察することはできない。描くことは「何か」という問い以前の、原初的な発想に基づいていると言うことが出来るのではないか。

それほどまでに、根源的な作品である。これは美術かと悩んでしまう。吉岡は作品が展示されていない壁面に椅子を用意したが、私は恐ろしくて座ってみるができなかった。極限にまで切りつめているのではなく、可能なまでに装飾もされていない画面にある絵具は、漂うのでも食い込むのでもなくただそこにあるだけである。「絵画とは何か」などといったインテリジェンスな会話を爆破してしまう。

この作品群はこれまでの美術史に当て嵌まらないし、ミュージアムピースとして評価されることは決してないだろう。インスタレーションとしての全体像であるなら、使用していない壁面に影響が及ぼされるはずだが、この作品群にそれはない。私の視線は果てしなく収斂され、画面の中へ吸い込まれていく。左の写真の如く、細部に何かが発見できるわけでもない。二色の拮抗により串田は筆を止める。私から見れば強制終了であり、串田自らが自らを処刑する姿を想起させる。その段階にまで自らを追い込み、自らを棄捨して串田は何を希求するのか。「美術とは何か」という柔な問いではなく、生きることは何かを問うている。

